

不屈の海5

ニューギニア沖海戦

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	米軍西進	9
第二章	爆撃編隊の奔流 <small>ボマー・ストリーム</small>	37
第三章	中部太平洋急襲	87
第四章	パラオの対決	117
第五章	因縁の海戦	157
第六章	ルーズベルトの思惑 <small>おもむく</small>	233

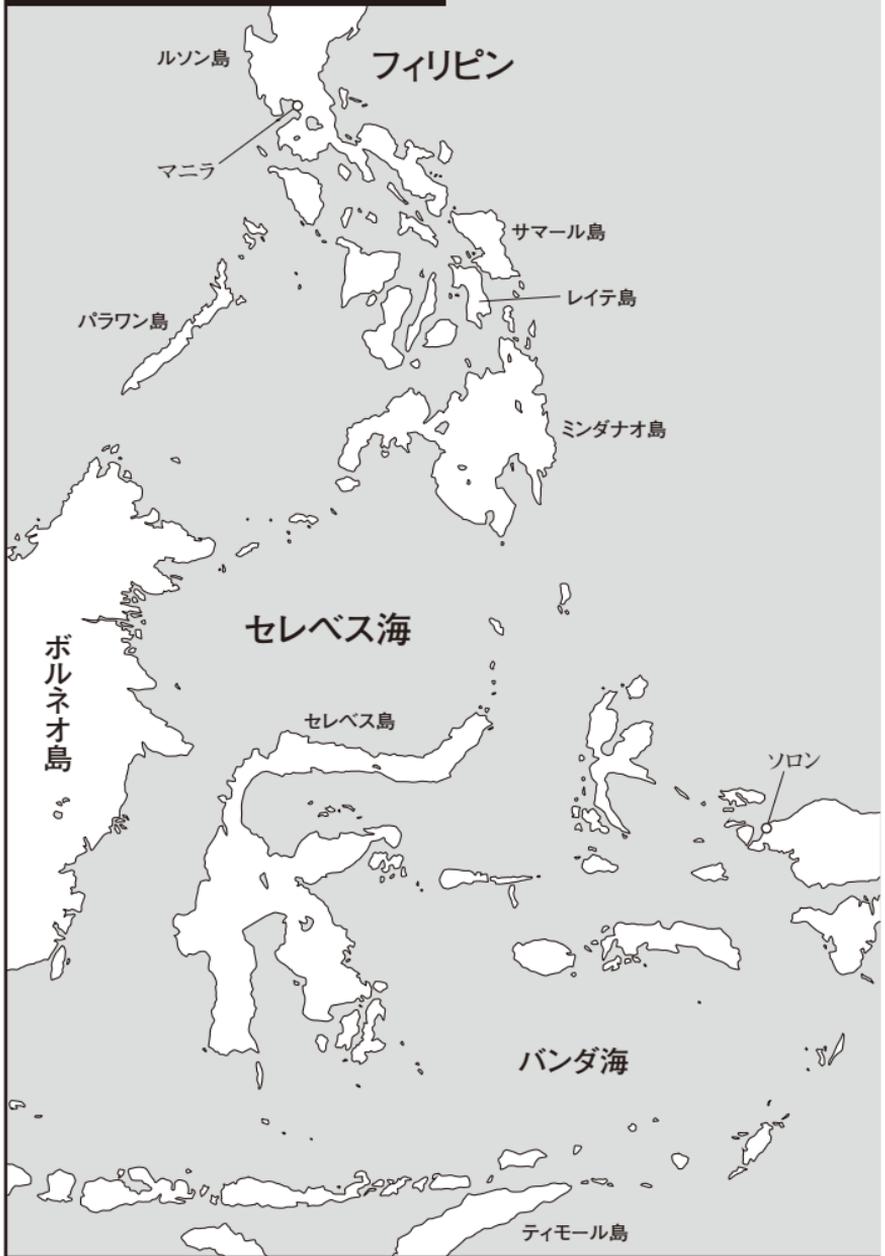
マリアナ諸島
サイパン島
テニアン島
ロタ島
グアム島

トラック環礁

パラオ諸島



南方地域要図





不屈の海

ニューギニア沖海戦

5

第一章 米軍西進

1

「海岸までの距離五〇〇(五〇〇〇メートル)」

第一四戦隊旗艦「鬼怒」の艦橋に、見張員が報告を上げた。

海上に、光は全くない。

三〇分ほど前までは、半月が西の空から海面に柔らかな光を投げいていたが、今は水平線の向こう側に消え去っている。

無数のガラス屑を撒いたような星々も、海上を明るくするには足りない。

それでも、目的地——ニューギニア島の稜線だけは、星灯りを背に、うつすらと浮かび上がっていた。

「周囲に敵影はないか？」

「本艦の見張員、各駆逐艦とも報告はありません」

第一四戦隊司令官堀勇五郎少将の問いに、「鬼怒」

艦長板倉得止大佐は答えた。

「〇五(五〇〇メートル)まで接近せよ」

堀は命じた。

ニューギニア北西岸のサルミを最前線として、米軍と対峙している陸軍第一八軍は、消耗が激しい。

同軍への補給物資はドラム缶に収納し、海岸付近で海面に投下するが、回収と陸揚げに当たる兵士たちの負担を少しでも軽くするため、陸地ぎりぎりまで近づくのだ。

「面舵一杯。針路一八〇度」

「面舵一杯。針路一八〇度！」

航海長五木三郎少佐が、板倉の命令を操舵室に伝え、「鬼怒」は艦首を陸地に向ける。

「両舷前進微速！」

を、板倉は下令する。

全長一六二・二メートル、全幅一四・七メートル、基準排水量五四二〇トンの艦体が、ゆっくりと陸地に接近する。

「六駆、七駆、本艦に後続します」

後部見張員が、僚艦の動きを報せる。

六駆、七駆は、いづれも特型駆逐艦四隻で編制された部隊だ。

「沈船、右一五度、一〇！」

艦橋見張員が注意を喚起する。

米軍の空襲を受け、大破着底した輸送船であろう。

このサルミでも、東方のホーランディアでも、二隻以上の輸送船が補給物資もろとも撃沈されている。

ニューギニアに向かう途中、潜水艦に撃沈された輸送船を加えれば、被害は更に増える。

今年——昭和一八年七月にニューギニアを巡る攻防戦が始まって以来四ヶ月、サルミヤホーランディアの沖は、輸送船の墓場と化した感があった。

鉄製の墓標とも呼ぶべき残骸の脇を、「鬼怒」はゆっくりと通過する。

「海岸までの距離、〇五！」

の報告が上げられたところで、

「面舵一杯。針路二七〇度！」

を、板倉は下令した。

「鬼怒」は再び艦首を右に振り、左舷側を海岸に向けた。

「両舷停止！」

の命令と同時に、左右二基の推進軸に伝える動力が切られ、逆向きの回転がかけられる。

艦尾付近の海面がひとしきり泡立ち、「鬼怒」は身震いしながら停止する。

陸地まで五〇〇メートルの距離に接近したが、肉眼では海岸の様子は分からない。待機している第一八軍将兵の人影は、視認できなかった。

「友軍に信号。『鞍馬』と送信せよ」

板倉は、信号長の鈴木信吾上等兵曹に命じた。

「鬼怒」の左舷側で信号灯が明滅し「クラマ」と三回繰り返して送信する。

闇の向こうに、橙色の光が点滅した。

島の稜線を浮かび上がらせるほどの光量はないが、「鬼怒」の艦橋からはっきり視認できた。

「合言葉を確認。『天狗』と返信しています」

「これで、はつきりしました」

鈴木うなぎの報告を受け、板倉は堀と顔を見合わせて頷うなずき合った。

合言葉による敵味方の確認が終わったのだ。

「全艦に信号。『作業開始』！」

「作業開始！」

堀が一四戦隊の全艦に命じ、板倉も甲板上で待機している乗員に下令した。

ほどなく、艦橋の後方から水音が聞こえ始めた。みずおと

食糧しじりょう、弾薬、医薬品等の補給物資を詰め込んだドラム缶が、海面に投下され始めたのだ。

甲板員めいだけでは足りない。水雷科の連管員れんかんいんや主計科員しゅけいがいん等、手が空いている者全てが作業に当たっている。

「六駆、七駆とも、作業開始しました」

後部見張り員が報告を上げた。

敵艦隊出現の兆候ちようこうはなく、補給物資の投下作業は順調に進展している。

大型発動機艇や小型発動機艇が繰り出され、ワイヤーに繋がれたドラム缶をフックで引っかけ、海岸へと引っ張ってゆく。

(どこまで有効か)

腹はらの底で、板倉は呟つぶやいた。

ニューギニアの守りに就いている第一八軍は、三個人団約三万の兵力を有していたが、戦闘によって消耗し、一月現在は二万名前後となっている。

二万名の兵力を維持するには、食糧だけで一日当たり三〇トン、一ヶ月ともなれば九〇〇トンを必要とする。

これに小銃、迫撃砲等、歩兵用の火器や弾薬、衣服を始めとする日用品、医薬品まで含めれば、必要とされる物資の量は数倍に跳ね上がる。

本来であれば、一隻で一〇〇〇トン単位の物資を運べる輸送船が何隻も必要だが、鈍足の輸送船は往

路で潜水艦に狙われ、入泊すれば敵機や水上艦艇に攻撃される。

輸送船喪失数の急増と第一八軍への補給の途絶を憂慮した大本営は、足が速く、自衛能力も高い軽巡、駆逐艦に、物資輸送を担わせると決定した。

だが、軽巡、駆逐艦では、たいした量は運べない。六駆、七駆の各艦は、九本を搭載可能な魚雷のうち、六本を降ろして補給物資を積んでいるが、搭載量は一隻あたり二〇トンが限界だ。

「鬼怒」も上限四〇トンと、駆逐艦よりはましという程度に過ぎない。

九隻合計二〇〇トンでは、全てを食糧にしたとしても、八日分がせいぜいだ。

これでは部隊の維持がせいぜいであり、米軍に対する反撃など思いもよらない。

それどころか、戦線の維持も難しい。

情報によれば、ニューギニアに展開している米軍は、総勢一〇万と伝えられる。

第一八軍の五倍の兵力であり、機械化率も高い。しかも周辺の制空権、制海権は米軍が握っているのだ。

このような状況下、第一八軍に細々と補給を行つたところで、どこまで戦況を好転させることができらるだろうか、と思わずにはいられない。

一艦長に過ぎぬ身で、中央の方針に異を唱えても仕方がないことは分かっているが――。

「『暁』より信号。『我、作業完了』」

「『朧』より信号。『我、作業完了』」

六駆、七駆の司令駆逐艦から上げられた報告が、板倉の思考を中断させた。

八隻の駆逐艦は、いち早く補給物資の投下を終えたのだ。

「鬼怒」は、まだ物資の投下作業を完了していない。艦橋の後ろからは、ドラム缶を海面に投げ込む水音が届く。

「伝令！ あと一〇分ほどで作業を完了します！」

主計科に所属する水兵が、投下作業の指揮を執っている主計長島原公男大尉の報告を伝えた。

時刻は、日本時間の一月五日一時二二分（現地時間同じ）。

一時三〇分前後には作業が終わり、撤収できる。

「今回はどうやら——」

一四戦隊の首席参謀永沢秀人中佐が言ったとき、「後部見張りより艦橋！ 右後方に閃光を確認！」

泡を食ったような声が飛び込んだ。

若干の間を置いて、砲弾の飛翔音が轟き、「鬼怒」の後方から炸裂音が伝わった。

「『漣』に至近弾！」

後部見張員が、新たな報告を上げる。

隊列の最後尾に位置する駆逐艦だ。

「作業中止！」

「右砲雷戦！ 目標、右後方の敵艦隊！ 応戦しつつ避退する！」

堀は、即座に二つの命令を発した。

「主計長、作業中止！」

「本艦針路三三〇度！ 両舷前進全速！」

板倉は、続けざまに三つの命令を発した。

「鬼怒」の艦上は、たちまち騒然となった。

この直前まで補給物資の投下作業に従事していた乗組員は、戦闘時の配置に向かって走り、射撃指揮所や水雷指揮所では、号令と復唱が交錯する。

補給物資の回収に当たっていた大発、小発は、作業を中止し、海岸に向かってゆく。

発動機の音には、どこか未練がましい響きが感じられる。

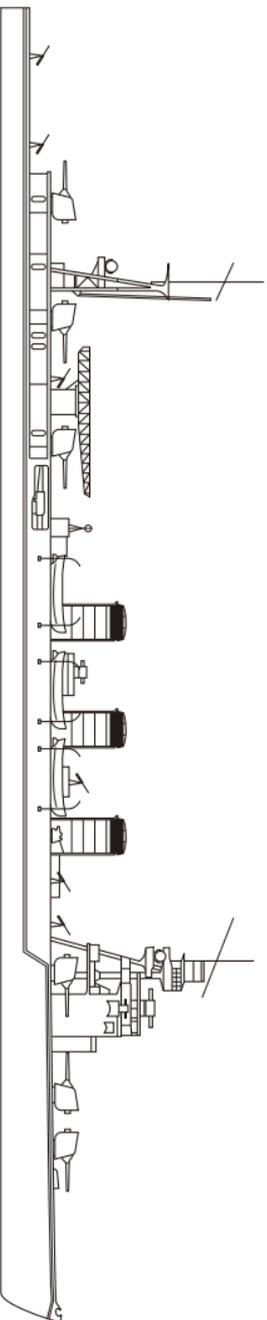
今日は来るか、明日は来るかと待っていた補給物資だ。海面に放置していくのは、断腸の思いに違いない。

だが、敵艦隊は既に砲門を開いている。

どれほど惜しくとも、断念する以外にない。

「鬼怒」が戦闘準備を整え、大発が避退する間にも、敵弾の飛来は相次いでいる。

日本海軍 長良型軽巡洋艦 鬼怒



全長	162.2m
最大幅	14.7m
基準排水量	5,420トン
主機	オールギヤードタービン 4基/4軸
出力	90,000馬力
速力	34.0ノット
兵装	14cm 50口径 単装砲 7門 25mm 連装機銃 2基 4丁 13mm 4連装機銃 1基 4丁 25mm 単装機銃 12丁 61cm 魚雷発射管 連装 4基
乗員数	490名
同型艦	「長良」「五十鈴」「名取」「由良」「阿武隈」

5,500トン型軽巡洋艦の第二世代にあたる長良型の五番艦。1922年（大正11年）11月に竣工した。前型の球磨型と比べ、雷撃力が強化されたほか、水上機用滑走台を設置することで航進中の水上機発進が可能となった。長良型の僚艦は主機に技本式衝動型/三菱パーション式のオール・ギヤードタービンを搭載しているが、本艦のみはブラウン・カーチス式タービンとなっている。ただ、この機関は故障が多く、就役後すぐに大規模な改修を余儀なくされている。

今次大戦までの期間に数多くの改装が施されたほか、開戦後も対空兵装の強化など戦況に応じた改造がなされ、外観も竣工時からは大きく姿容している。艦齢20年を超える老艦であるが、それだけに乗員も艦の扱いに熟達しており、いざというときに頼れる艦として海軍首脳部からも信頼されている。

右後方に発射炎が繰り返し閃き、敵弾の飛翔音が轟き、炸裂音と共に大量の海水が飛び散る。

最初に標的とされた「漣」以外にも、七駆の「曙」「潮」、六駆の「雷」「電」といった艦が、至近弾を受けているようだ。

「六駆、七駆に信号。『我ヲ省ミズ避退セヨ』」
堀は新たな命令を発した。

「鬼怒」から、駆逐艦八隻に信号が送られる。

六駆、七駆の駆逐艦が命令に従い、「鬼怒」より先に避退を開始する。

「面舵一杯。針路三三〇度！」
「両舷前進全速！」

五木航海長が操舵長と機関長に指示を送り、艦底部の鼓動が高まる。

「鬼怒」は右に大きく艦首を振り、速力を上げる。

その動きを見澄ましていたかのように、敵弾の飛翔音が迫った。

轟音は「鬼怒」の頭上を通過し、左舷側海面に水

柱を噴き上げた。

「軽巡の主砲だな」

弾着の瞬間を観察し、板倉はそう直感した。

水柱の高さは、「鬼怒」の上甲板を越えるかどうかといったあたりだ。艦底部から伝わる爆圧も、さほどではない。

おそらく軽巡の一五・二センチ主砲であろう。

「砲術より艦橋。敵は巡洋艦三、駆逐艦一〇以上。本艦よりの方位七五度、距離八〇（八〇〇〇メートル）！」

「目標、右前方の敵巡洋艦。魚雷発射始め、砲撃始め！」

砲術長水上明少佐の報告を受け、堀が一四戦隊の全艦に下令した。

敵は圧倒的に優勢であることに加え、先手を取られている。夜戦を得意とする水雷戦隊であっても、勝てるとは思えない。

ここは、さっさと逃げるのが得策だ。

前方に多数の発射炎が閃き、太鼓を連打するような砲声が伝わる。

六駆、七駆の駆逐艦八隻が、砲撃を開始したのだ。

「鬼怒」も、右舷前方に指向可能な一、三番主砲を発射する。前甲板から右舷側に発射炎がほとぼしり、一四センチ砲の砲声が殷々と轟く。

「水雷より艦橋。一、三番連管、魚雷発射完了！」

「通信より艦橋。『暁』『隴』より入電。『我、魚雷発射完了』」

砲撃の合間を縫って、水雷長津久井正少佐と通

信長宮島賢吉少佐が報告を上げる。

「投雷はしたが……」

口中で、板倉は呟いた。

「鬼怒」から四本、六駆、七駆の八隻から各三本、

計二八本が、一四戦隊の発射雷数だ。

雷撃距離が八〇〇メートルであることを考える
と、無効となる可能性が高い。

せめて牽制になれば、と考えていた。

「鬼怒」も、八隻の駆逐艦も、全速航進しながら砲撃を繰り返す。

後部の主砲も目標を射界に捉えたらしい。前後から伝わる砲声が艦橋を包む。

右舷側海面には、発射炎が間断なく閃き、敵弾の飛翔音が夜の海面をどよもす。

彼我共に、直撃弾はない。

敵弾は「鬼怒」の周囲に落下するものの、被弾の衝撃が艦を震わせることはなく、周囲の海面を激しく沸き返らせるだけだ。

それでも至近弾は何度か喰らい、奔騰する水柱が上甲板や主砲の天蓋、砲身に降りかかっている。

「一番缶室、二番機械室に軽微な浸水あり！」

機関長実松平造少佐から報告が届く。爆圧が、艦底部を痛めつけたようだ。

「鬼怒」の速力は衰えない。第一四戦隊の殿軍を守りつつ、最大戦速で離脱を図っている。

敵の発射炎は、右正横から右後方へと移動しつつ

ある。「鬼怒」は、敵から遠ざかりつつあるのだ。

(敵の射程外まで突っ走れ！)

自艦と前をゆく八隻の駆逐艦に、板倉が呼びかけたときだった。

敵弾の飛翔音が急速に拡大したかと思うと、「鬼怒」の周囲に複数の水柱が同時に上がり、艦橋の後ろから炸裂音と衝撃が伝わった。

「副長より艦長。射出機損傷！」

応急指揮官を務める副長秋山高則中佐が報告を上げる。

「輸送任務中でなかったら、致命傷になるところだ」

板倉は、額の汗を拭った。

射出機の周囲は、航空燃料や油脂等、可燃物が集中している。ここに被弾したら、火災が発生し、敵に恰好の目標を与えることになる。

だが「鬼怒」は、八隻の駆逐艦と共に物資の輸送任務に従事するため、水上機と航空燃料、油脂類を

降ろし、後部に補給物資を満載して来た。

その補給物資も、あらかた降ろしている。

本来の任務ではない物資輸送任務に就いたことが「鬼怒」を危険にさらしたが、同時に「鬼怒」を致命的な一撃から守ったのだ。

敵の砲撃は、なお続いている。

五秒から六秒置きに、数発が唸りを上げて飛来し、一発乃至二発が直撃する。

被弾の度、「鬼怒」の艦体は激しく震え、軋むような音を発する。

「七番主砲、被弾！」

「五番主砲、被弾！」

「後甲板に被弾。火災発生！」

被害箇所が報告が、次々と飛び込む。

「鬼怒」も右舷側に指向可能な四基を動員し、反撃の砲火を浴びせる。

一四センチ砲の砲声が轟き、発射の反動が艦橋に伝わる。

反撃を嘲笑うように、敵弾は繰り返し飛来する。

新たな直撃弾が六番主砲を爆砕し、中央部への一発は、二番煙突を付け根からへし折る。

前部にも、敵弾一発が命中する。

数秒置きに発射炎を閃かせていた二番主砲の正面防楯に、直撃弾の閃光が走り、引きちぎられた砲身や引き裂かれた鋼板が、空中高く舞い上がる。

被弾の衝撃が収まったとき、二番主砲は全壊しており、跡には砲座だけが残っている。

多数の直撃弾に艦体を抉られながらも、「鬼怒」の機関は全力を発揮しており、艦を三四ノットの最大戦速で走らせている。

「頑張ってくれ、機関長。今の出力を維持してくれ」
板倉は、実松機関長に呼びかけた。

艦の心臓部さえ健在なら、離脱は可能だ。

「鬼怒」は古い艦だが、乗員にはベテランが揃っている。五五〇〇トン型軽巡の扱いに精通した、貴重人材だ。

彼らを一人でも多く、内地に連れ帰ることが、艦長たる自分の責務なのだ。

「現出力の維持。宜候！」

実松が威勢のいい声で返答したとき、「鬼怒」を囲むようにして、複数の水柱が奔騰した。

同時に艦橋の後方から、これまでにはなかった異様な衝撃が伝わり、機関室に通じる伝声管から、何かが壊れるような音と、複数の乗員が上げる絶叫が聞こえた。

最大戦速で突っ走っていた「鬼怒」の艦体が急激な制動をかけられ、艦橋内の全員がよろめき、あるいは転倒した。

板倉は両足を踏ん張り、辛うじて転倒を免れた。
「機関長！ どうした、応答しろ！」

実松に呼びかけるが、応答はない。伝声管からは、蒸気が噴出するような甲高い音と共に、呻くような声が伝わって来る。

「司令官、機関室に被弾。機関長は生死不明です」

状況を悟り、板倉は堀に報告した。

「鬼怒」の舷側を貫通した敵弾が、缶室に突入して炸裂した可能性が高い。

「鬼怒」の機関出力は大幅に低下したのだ。

敵弾は、なおも「鬼怒」を襲っている。

数秒置きに轟音を上げて飛来し、「鬼怒」の舷側を抉り、甲板を引き剥がし、上部構造物を打ち砕く。

大正年間に建造された旧式艦ながら、水雷戦隊の旗艦としては充分な性能を持っていた五五〇〇トン型軽巡は、急速に艦の原形を失い、浮かぶ鉄屑と化してゆく。

「止むを得ぬ。総員退艦させよ！」

敵弾の飛翔音、炸裂音が間断なく轟く中、堀は慌ただしく下令した。

板倉は、艦内放送の設備が生きているうちに——と考え、高司令達器のマイクを手を取った。

その直後、新たな敵弾の飛翔音が轟き、真っ赤に赤熱した塊が、艦橋の右から飛び込んだ。

板倉は両目を大きく見開いたが、その直後、艦橋内の全員が飛び込んで来た敵弾になぎ倒され、板倉の意識も炎の中で暗転していた。

「総員退艦」の命令も出せぬまま、「鬼怒」はなおものろろと前進を続け、残された主砲で砲撃を続けたが、その奮闘も終わるときが来た。

大半の上部構造物を、原形も留めぬほど打ち砕かれ、炎と黒煙に包まれた艦体は、ゆっくりと右に横転し、大量の水蒸気を噴出させた。

それが収まったとき、海上に「鬼怒」の姿はなく、後には僅かな漂流物が残っているだけだった。

堀司令官も、板倉艦長以下の乗組員も、遂に知ることはなかった。

第一四戦隊が放った、魚雷二八本の戦果を。

軽巡三隻のうち一隻——新鋭軽巡の「モントピア」は、艦首水線下を魚雷に食いちぎられ、黒煙を噴き上げながらその場に停止している。

リヴァモア級駆逐艦の「ポールドウィン」は、魚

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。